

テキストを裏切るテキスト

——『竹林はるか遠く』における戦争の記憶と記憶の戦争

李 恵 慶 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

キーワード：記憶／忘却、国家身体、表象（不）可能性、被害者意識、帝国主義的ノスタルジア

はじめに

20世紀は戦争の世紀といわれる。しかし21世紀になって久しい現在も世界各地では多くの戦争が繰り返され、不幸の最中にいる人々が少なくない。その中、ある戦争が終わると記憶の戦争が始まる。ルナンの国民の定義を想起するまでもなく⁽¹⁾、何を記憶し、何を忘却するかという問題は、ナショナルな主体形成において欠かせないものである。さらに、世界経済の急速なグローバル化に伴い、どの地域でも異なった歴史や文化、伝統、記憶を持った集団によるトランスナショナルな社会空間が創出されつつある今日において、それはなお重要な問題であり続けている。本稿で取り上げる『竹林はるか遠く——日本人少女ヨーコの戦争体験記（*So Far from the Bamboo Grove*）』⁽²⁾（以下『竹林』）は、歴史認識及び記憶の問題をめぐるトランスナショナルな展開がどのようなものなのかを示す象徴的テキストである。

『竹林』は、1986年に日系アメリカ人のヨー

コ・カワシマ・ワトキンスが自身の太平洋戦争体験を基に著した自伝的小説である。物語は日本の敗戦の色が濃くなっていた1945年7月、当時朝鮮北部に住んでいた11歳の少女がソ連軍や反日共産軍から逃れ、日本に引揚げられるまでの避難生活を中心にし、その後の「孤児同様」（205頁）の生活や、勤労働員で離れ離れになっていた兄との再会が主な内容となっている⁽³⁾。この作品に対するアメリカでの評価は出版当初はむろん、約30年近く経っている現在もひじょうに高く、これまで多くの中学校で副読本の教材として採用されてきた。そのため、アメリカの子供たちには戦争の悲惨さや無意味さを訴える平和のための戦争体験記として広く親しまれている。

日本では2013年によりやく翻訳出版されたが、韓国では2005年、日本を先んじて『ヨコ物語』⁽⁴⁾というタイトルで出版された。それに際しては、「なぜ日本と中国ではこの本の出版が禁止されたのか」という、些か刺激的で意味深長なキャッチコピーが躍っていたこともあり、売れ行きは悪くなかったものの⁽⁵⁾、出版当初の社会的注目度はそれほど高くなかった。だが、2007年になるとその状況が一変する。この本をめぐる激しい論争がアメリカを巻き込ん

(1) Ernest Renan, Qu' est-ce qu' une nation? , *Œuvres Complètes*, vol.1, Calmann-Lévy, 1887, pp.277-310:エルンストルナン『国民とは何か』鵜飼哲他訳、河出書房新社、1997年、41-64頁。

(2) Yoko Kawashima Watkins, *So Far From The Bamboo Grove*, Harper Collins, 1986:ヨーコ・カワシマ・ワトキンス『竹林はるか遠く——日本人少女ヨーコの戦争体験記』都竹恵子訳、ハート出版、2013年。以下、『竹林はるか遠く』からの引用はすべて日本語版の頁数のみを本文中に記す。

(3) 『竹林』の続編として *My Brother, My Sister, And I* (1994) が出版されている。

(4) ヨーコ・カワシマ・ワトキンス『ヨコ物語』ユン・ヒョンジュ訳、文学トンネ、2005年。

(5) 現在、韓国内でのこの本の正確な売れ筋を把握することは困難であるが、2007年1月17日付の「毎日経済」によると4000部が売れたという。

で韓国で起こり、当時、大きな社会問題となった。「ヨーコ物語論争」⁽⁶⁾（以下「ヨーコ論争」）と呼ばれるものがそれである。それを機に作品に対する注目度は一気に高まり、作品や作家に対する批判も集中する。

「間拔けた韓国、日本すら拒んだ『ヨーコ物語』出版」「アメリカも騙された日本版「アンネの日記」」「『ヨーコ物語』歪曲だらけ」「実話？聞いた話を小説化した可能性あり」「日本の戦犯の娘が書いた出鱈目な朝鮮回想記」等など⁽⁷⁾、当時の各日刊紙の関連記事に付けられた刺激的なタイトルからも容易に想像できるように、「ヨーコ論争」の議論的になっていたのは著者の歴史認識についてである。

そもそもこの論争の発端は、2006年9月のアメリカのボストンにいる一人の韓国系学生の訴えであった。当時『竹林』を用いて行われた授業中に、韓国系であるがゆえに覚えざるをえなかった「加害者」——これについては後述するが、『竹林』では韓国人男性が日本人女性に性暴力を行う「加害者」としてしか描かれていない——としての「嫌な思い」が学生の親御さ

んに訴えられ、その直後から教材採用反対運動へと発展したのが始まりである。その動きはすぐさまアメリカ全域に広がり、ニューヨークでは登校をボイコットする学生まで出て、アメリカでも看過できない事態となった⁽⁸⁾。そういうことが韓国に伝わると、論争は一気に燃え上がり⁽⁹⁾、多くの韓国人が韓国系アメリカ人たちの活動を支持するとともに、アメリカの教育界にも圧力をかけるようになる。現在も『竹林』の教材採用中止運動は、ボストンの韓国系アメリカ人を中心に結成された「正しいアジア歴史教育のための父母会（Parents For an Accurate Asian History Education）」により、持続的かつ体系的に行われている⁽¹⁰⁾。

このように、日系アメリカ人と韓国系アメリカ人との太平洋戦争をめぐる「戦争の記憶」が、韓国やアメリカを巻き込んだ「記憶の戦争」の契機となったのが「ヨーコ論争」である。これは、ベネディクト・アンダーソンによって新たに提唱された「遠距離ナショナリズム（long distance nationalism）」⁽¹¹⁾を彷彿させる。祖国から遠く離れながらも、それゆえ、本国との

(6) アメリカを巻き込んで起こったこの論争は、米山リサのいう「日本の歴史認識問題のアメリカ化」とつながるものがある。詳しくは米山リサ『暴力・戦争・リドレス——多文化主義のポリティクス』岩波書店、2003年、158-216頁を参照。

(7) 現在は関連記事をネット版では読めなくなったが、タイトルだけは個人のブログで確認することができる。本稿では、<http://blog.naver.com/PostView.nhn?blogId=sunyeab&logNo=60033320089>（2007年1月28日 updated）を参照した。

(8) 『竹林』の主人公の擁子と同じ年の11歳の韓国系の学生（韓国のメディアでは、ホ・ボウン（アメリカ名：アレックス・ホ）と実名で紹介されている）が1週間登校を拒否した。その結果、彼女の学校では『竹林』が教材から排除されることになる。関連記事は現在、<http://blog.daum.net/mentorpark/10554971>（2014年6月2日 accessed）で確認できる。

(9) これについては韓国系アメリカ人による韓国語版に対する問題提議も大きく影響していた。かれらからは著者や本に関する間違った情報と紹介、誤訳の問題、そして出版社による内容編集等など、実に様々な問題が指摘された。そのなかで、著者の父親が731部隊の幹部である疑惑が持ちだされると、出版社は異例のお詫びと本の販売中止・回収の発表を行うことになる。韓国での「ヨーコ論争」は、アメリカでの韓国系アメリカ人らの『竹林』との「戦い」だけでなく、韓国語版の様々な問題により、さらに激しくなった。詳しくは2007年1月24日付連合ニュースを参照。現在、以下のサイトで読める。<http://blog.daum.net/amadacy/10516653>（2007年2月27日 updated）

(10) 「ヨーコ論争」が起こっていた当時の活動成果については、2007年1月24日付の中央日報などを参照。また同年2月3日付の中央日報の記事によると、韓国系アメリカ人の教材採用中止運動は中国系アメリカ人との連携が図られ、これまでの市立だけでなく公立学校も教材使用中止に加わっているという。この記事は現在、以下のサイトで読める。http://article.joins.com/news/article/article.asp?total_id=2625165&clcc=joongang&article%related_news（2014年6月2日 accessed）ただ、現在はまた少しずつ副教材としての採用が増えていると伝わる。これについては様々な要因が考えられるが、まず東アジアの歴史に関するテキストがきわめて少ないことが挙げられよう。しかし以前と違うのは、一方では『竹林』を教材として用いながら、他方ではその対抗小説として書かれたテキスト——チェ・シュクリョルの『失われた時間』やキム・ウングクの『奪われた名前』などが代表的である——を併用するなど、東アジアの歴史に対するバランスの取れた教育のための工夫が行われつつあることである。

(11) ベネディクト・アンダーソン『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』粕谷啓介他訳、作品社、2005年、98-127頁。

つながりを維持し強化しようとするエスニック・グループのナショナルな心情は、今後、世界各地で強まると思われる。その意味でも『竹林』をめぐる論争が示唆するものは大きい。

一見すると『竹林』の説話論的構造は単純明瞭である。「何不自由なく幸せに暮らしていた」(4頁) 11歳の少女が戦争に巻き込まれ、「死ぬか生きるかの戦い」(5頁)をし、それに見事に勝つ。しかしこのテキストは見た目ほど単純ではない。詳細は後述するが、この作品はいわゆる「少女の成長物語」や「教養小説」に還元されえない様々な要素を持っており、さらに著者のいう「平和に関する本」⁽¹²⁾ではなおさらない。結論を先取りすると、このテキストは一方では反戦・平和のメッセージを訴えながら、他方ではナショナルな自己肯定物語の構築という相反する二つの作業からなる重層的なものである。これまで韓国では『竹林』をめぐる多くの先行研究が行われてきたが、「ヨーコ論争」に焦点を当てた社会文化批評が殆どで、テキストを詳細に読んだものは皆無に等しい。その状況に鑑みて、以下では『竹林』に様々な観点からアプローチし、もっぱらテキストの政治的無意識性の析出に努める。なかでも戦争の悲惨さを告発するはずのこのテキストがいかにかそれを裏切り、ナショナルな自己肯定という大きな物語へ包摂されていくのかを明らかにする。

1. 戦争批判のロジック ——反転する「平和の書」

『竹林』の著者は、韓国語版の序文に寄せられた、「韓国の読者たちへ」と題された手紙のなかでこの作品を「平和に関する本」と位置づけている。テキストでは戦争の悲惨さ・残酷さが、銃弾の飛び交う戦場からではなく、戦争に翻弄された人間の悲劇や家族の絆といった人間の物語の視点から描かれている。「自分の家族も第二次世界大戦に翻弄された多くの人のひとり」であり、これからは「憎しみ」ではなく、「愛」と「優しさ」をもって世界平和のために一緒に歩んで行こう、という著者のメッセージ

が大きな感動をもって心に訴え掛けられるのは、それが彼女の体験から導き出された「実話」ということと無関係ではない。

一見すると人間ドラマ仕立てのこのテキストは少女の成長物語にみえる。そのためか、戦争に対する直接的な批判はまったくといっていいほどない。あくまで戦争に翻弄されながらも、がむしゃらに前向きに生きていく小さな少女の姿に焦点が置かれ、当時の歴史的・政治的コンテキストについての言及は徹底的に排除されている。ただ、一か所だけ例外がある。物語の序盤部に挿入されている擁子の兄・淑世が予科練への入隊を家族に告げる場面がそれである。

「級友のほとんどが入隊しているよ」

淑世は、特に真剣な口調で言った。

「自分の国を助けに行くと決めたんだ」

「行っではいけないわ。淑世」

母は言った。

(中略)

「僕はお母様を尊重していないわけではありません。でもお母様は、世界で何が起きているのか分かっていないんです」淑世は言葉が続けた。

「僕たちの国は若い兵士を必要としているんです」

母は語気を強めた

「東條内閣が真珠湾を攻撃し、戦争を始めたのが一番悪いのよ。お父様は日本政府のやり方に反対なのに」

母の声は震え始めた。

「政府は私たちの平和、愛、幸せの全てを奪っているわ。夫や息子を失うくらいなら、国が戦争に負ける方がずっとましだわ」

それだけ言うとわっと泣き出した。(27～28頁)

母親は、戦争を起こした日本政府を名指して批難し、息子の予科練への入隊を必死に阻止しようとする。何があっても自分の息子だけは戦場に向かわせたくないのが母親としての当然の

(12) ヨーコ・カワシマ・ワトキンズ『ヨーコ物語』ユン・ヒョンジュ訳、文学トンネ、2005年、9頁。

気持ちであろう。特に予科練という組織がどのようなものであったかを思い出すとそれは尚更であると思われる。

よく知られているように、日本の敗戦が濃厚になった戦争の終盤になると、予科練出身者の多くが神風特別攻撃隊に当てられ、戦場に散っていった。この物語の時代的背景が1945年7月前後であることを考えると、予科練への入隊が何を意味するのかは多言を要しない。母親にとっては「英雄」という称号も「立派な勲章」(29頁)も息子の命に代えられるものではなく、「息子を失うくらいなら、国が戦争に負ける方がずっとまし」である。「勝つ望みがない」(30頁)戦争への出陣は、「勇気ある死」(29頁)どころか「命を粗末に」(30頁)することに等しい。その意味では母親の非難の矛先が戦争を仕掛け、若い人を「死」へ駆り出していた当時の日本政府や東條内閣に向けられることに何の不思議もない。母親によるこの政府批判こそ、著者の熾烈な戦争批判に他なるまい。

ところで、この個所は見た目ほど単純ではないように思われる。結論からいうと、そこには著者の戦争に対する政治的無意識が色濃く投影されており、戦争批判とはほぼ無縁である。それを明らかにするためにまず指摘すべきは、戦争責任に関わる事柄である。上記の引用で明らかのように、擁子の母親は「私たちの平和、愛、幸せの全てを奪っている」戦争の責任を、(日本)政府(The (Japanese) government)や東條内閣(Tojo government)⁽¹³⁾に限定し、それを繰り返し強調している。その言葉の裏から

は、太平洋戦争を起こしたのはあくまで真珠湾攻撃の決定を下した政府や当時の内閣なのであり、少なくともそれが日本国もしくは日本国民の全体的意志ではないという意識が透けて見える。これは別に真新しいものではない。問題はそれが戦争責任回避の口実として持ち出されていることである。

太平洋戦争の責任を政府や内閣に限定することにより、国として、国民として当然負うべき責任は曖昧になり、やがては蔑ろにされる。それを揺るぎないものにしてしているのが、「政府は私たちの平和、愛、幸せの全てを奪っているわ」という言葉に集約されている被害者意識である⁽¹⁴⁾。戦争をめぐる示唆的な論考がすでに示していたように⁽¹⁵⁾、そもそも戦争における「加害者」「被害者」の境界はさほど明確ではなく、単純に二分できない。そのため、二項対立構造のなかでそれらを捉えてしまうと実に多くの事柄が見落とされ、総体をつかむことは困難である。それについてここで詳しく述べる余裕はないが、『竹林』における問題は加害者としての意識の欠如が、いつのまにか「戦争に翻弄されたのは自分たちも同じである」という被害者意識⁽¹⁶⁾へとすり替わっていることである。それに擁子家族の加害国の国民としての責任は厚いベールに覆われ、記憶の彼方へ消し去られる。

仮に、日本の仕掛けた戦争が国民的合意ではなかったにしても、それが国民的な共感と支持無しではありえなかったことを忘れてはならない。同様なことが『竹林』からも読み取れる。上記の引用の直前に挿入されている病院慰問の

(13) Yoko Kawashima Watkins, *So Far From The Bamboo Grove*, Harper Collins, 1994, p.17. ちなみに、韓国版では「東條内閣」は「我が国」に、「日本政府」は「我が政府」に、「政府」は「戦争」に訳されている。この訳の仕方には大きな問題があり、特に最後の訳は看過できない。戦争責任を一般化することにより、太平洋戦争の本質を見えなくするだけでなく、日本の戦争責任を曖昧にしている。

(14) 米田佐代子によると、日本の女性たちは戦争に協力していたにもかかわらず、基本的には侵略戦争の「犠牲者」という立場に貫かれていたが、1980年代前後から「加害者」としての視点・認識が生まれてきたという。詳しくは米田佐代子『日本近代女性史』新日本出版社、1972年や、「ジェンダーの観点からみた8・15——日本の女性：1945年8月15日をどのように記憶してきたか——」『韓中日3国の8・15記憶』歴史批評社、2005年、19-46頁を参照。

(15) 例えば、極限における人間についての思索を重ね、「灰色の領域」を導き出したブリーモ・レーヴィの一連の仕事はその適例である。とりわけ「灰色の領域」については、ブリーモ・レーヴィ『溺れるものと救われるもの』竹山博英訳、朝日新聞社、2007年を参照せよ。

(16) これは先述の、韓国版の序文のなかでの自分の家族も第二次世界大戦に翻弄された多くの人のひとりであるという著者の考えと合致する。

エピソードはその好例である。

擁子は、「陸軍病院での負傷兵のための催し物に参加する子供の一人に選ば」(18頁)れ、家族みんなで病院を訪れ、「みんなの幸せのために一生懸命に踊」(20～21頁)る。しかも慰問公演後は、「国のために戦った」(21頁)重度の負傷兵たちを労い励ますため、病室を回り、「やさしく握手をしながら、一日も早い回復を願」(21頁)う。これはサム・キーン「女神」「看護婦」「見物人」「精神的観衆」⁽¹⁷⁾や、ジーン・エルシュテン「戦争のチアガール」⁽¹⁸⁾といった、戦争をつくる女性のイメージや役割と合致するものである。

また、予科練へ志願しようとする淑世や、「武運長久」(13頁)と書いて習字の練習をしていた擁子を思い出してほしい。かれらはみんな軍国少年・少女であり、そうしたことが多くの人の「平和、愛、幸せの全てを奪」う戦争を支え、国民全体へ駆り立てていたのだ。

結局、一見戦争と無関係にみえる女性や子供たちもその「協力者」なのであり、その働き＝「戦い」は戦場の兵士たちとほぼ同等の意味を持つ。日本政府や東條内閣の「暴走」は、擁子家族によって示された「支持」と「共感」によって可能だったのであり、傍観者を含め、「日本」の「国民」の誰しもが戦争加害者という立場から自由ではありえない。

もう一つ、指摘しなければならないのは、『竹林』での戦争がもっぱら真珠湾攻撃以降の太平洋戦争を指している点である。太平洋戦争は当然、日本帝国が近代化以降行ってきた様々な戦争や植民地支配の歴史と切っても切れない関係にあり、その歴史的連続性を断ち切ることは不可能である。しかし、『竹林』では太平洋戦争をめぐる歴史的連続性をすべて捨象し、空白に

している。そこでは戦争の矮小化が図られ、太平洋戦争以前の暴力的な政治コンテキストは脱歴史化され、不問に付される。例を一つ挙げてみよう。擁子は父親が「満州鉄道で働いてい」て、「満州の国境線から八十キロ程離れたこの古い町で育った」(11頁)といいながらも、なぜ自分たちが満州や朝鮮半島に移住していて、朝鮮人がどうして「日本帝国の一員である」(18頁)かについての言及は何一つない。まったく触れていないどころか、朝鮮人を、同じ「帝国臣民」であるにも関わらず「日本人を嫌い、戦争をよく思わない」(同頁)⁽¹⁹⁾「恐ろしい」(同頁)「敵」に仕立てている。ここでは加害者と被害者をめぐる二項対立が見事に転倒され、擁子家族はその「敵」から酷い目にあう哀れな犠牲者として生まれ変わる。これが大きな犠牲を強いられ、今もなお苦しみつづけている旧植民地(出身)の夥しい人々に対する更なる暴力であることはいうまでもない。

『竹林』での戦争批判はきわめて逆説的である。一方では戦争批判を通じた「平和の書」を標榜しながら、他方では戦争を矮小化し、被害者意識のなかで加害者の姿をこっそり削ぎ取り記憶の彼方へ葬っている。『竹林』は「平和に関する本」などではない。むしろ、ナショナルな自己肯定の書としてひじょうに政治的なものである。

2.戦争暴力の表象(不)可能性 ——リアリティへの固執と物語の陥穽

戦争批判をめぐるロジックにおけるテキストの二重性が明らかになったところで、以下では性暴力に注目してみよう。それは『竹林』が告発する戦争暴力の象徴的表象で、擁子らの被害者意識を決定づけている⁽²⁰⁾。

(17) サム・キーン『敵の顔——憎悪と戦争の心理』佐藤卓己・佐藤八寿子訳、柏書房、1994年、64頁。

(18) ジーン・エルシュテン『女性と戦争』小林史子・広川紀子訳、法政大学出版局、1994年、296頁。ちなみに、エンシュテンのチアガールの概念をより発展させ、戦争と女性との関わりについて鋭いメスを入れたのが若桑みどりである。詳しくは若桑みどり『戦争がつくる女性像——第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房、1995年、特に101-115頁を参照。

(19) 日本語版では「朝鮮人たちは大日本帝国に統治されていたために、日本人を嫌い、戦争を快く思っていなかった」(傍点引用者)とされているが、ここでは原文の「The Korean were part of the Japanese empire」(p.9)の意味に忠実に従うため、訳を修正させていただいた。

『竹林』は1945年7月29日の夜中に、ソ連軍の朝鮮半島上陸の知らせを受け、避難することから物語が始まる。緊迫漂う松村伍長の警告により、満州にいる父や勤労働員でしばし家を離れていた兄を待つことを諦め、とりわけ擁子の母娘の三人だけで「竹林の中にある」家に「永遠の別れを告げ」（10頁）、駅に向かう。彼女らの避難生活を待っていたのは実に辛いものであった。最初の避難列車での死んだ赤ん坊を取り上げられた母親の、まるで気が狂ったかのように、外に放り投げ出される我が子の後ろを追って列車から飛び降る場面を皮切りに、食べ物求めて生ゴミを漁り盗みも働く擁子姉妹の姿や、爆撃で炎上し修羅場と化す列車、反日共産軍によって無差別に殺される避難民の姿など、思わず目を逸らしたくなる数々のエピソードから、彼女らの避難生活と戦争の惨状が如実に物語られる。

擁子らは釜山で引揚げ船に乗り、朝鮮を離れるまで厳しい生存の危機に直面し、「死ぬか生きるかの戦い」をする。なかでも彼女らを最も苦しめていたのが朝鮮人男性による性暴力である。初めてその危機にあったのが、松村伍長が手配してくれた避難列車を途中下車した後である。彼女らは、列車に乗り込んできた朝鮮兵から朝鮮半島に上陸したソ連軍がすでに自分らの搜索に乗り出していることを知り、京城駅まで徒歩で向かうことにする。途中、久しぶりに行水をしご飯を食べしばしの休憩を取っていると、「どこからともなく突然、三人の共産兵」（68頁）が現われ、彼女らの前に立ちはだかる。

そしてそのなかの一人が姉の好を見て、「今夜楽しむには、丁度いい年頃だな」（69頁）とつぶやく。恐怖で身動きが取れなくなっていたなか、「兵隊の言葉が終わるか終らないかのうちに」（同頁）、またもやどこからともなく出現したアメリカ戦闘機による爆撃によって、「すぐに地面に伏せ」（同頁）なかった彼らは全員死ぬ。擁子は爆弾の破片で耳と胸に怪我を負うが、好は間一髪のところを救われる。まだ10代の少女たちにとってこの出来事がどれほどの恐怖だったのかは想像に難くない。

以後の避難生活は性暴力との「戦い」といっても過言ではない。男の子に見せかけるために自分たちを犯そうとして死んだ共産軍の血だらけの軍服を身に纏い、髪を剃る。一応、「坊主になりたくないよお」（71頁）と泣きわめき、抵抗してみたものの、やがて「悲惨な有様」（同頁）となった頭を見るや否や、空の水筒を「思いっきり強く地面に投げつけ」（71頁）る擁子の気持ちが切なく胸にしみる。年齢的にも男の標的になりやすかった好は、頭を丸めるだけではまだ物足りず、胸を、擁子の「胸の傷を巻くために使ったガーゼで胸をきつく巻」（112頁）き平らにする。それでも相次いで性暴力の場面に遭遇してしまうと、ついに二人は「男のように立小便」（117頁）をする。小便で下着やズボンがずぶ濡れになる最も耐えがたい悲惨なものであったが、それでも「身の安全には代えられな」（同頁）かった。そうした彼女らの「戦い」からは悲壮感すら漂う。

『竹林』の性暴力の場面を特徴づけるのは女

(20) 旧朝鮮総督府の官房総務長官であった山田酒喜男の手記『朝鮮総督府終政の記憶（一）』には、実際朝鮮半島北部から脱出してきた人の証言から朝鮮人による家の接収や財産の略奪、およびソ連兵や朝鮮人による女性への性的暴力が述べられている。これについては、森田芳夫・長田かな子編、『朝鮮終戦の記録』、巖南堂書店、1964年、12頁を参照せよ。また、当時の日本人女性への性的暴力を象徴的に表しているのがロシア語の「マダムダワイ（女がほしい）」であることを思い出すと、日本の敗戦後、植民先の日本人女性たちがいかに性的暴力に曝されていたのかが容易に想像される。日本人の引揚げを主題化した作品のなかでも性暴力に関するものが必ずといっていいほど登場し、もっぱら「被害者」として描かれている。その意味では『竹林』はそれらの延長線上にあるものといえる。引揚げ物語が被害者意識に貫かれているのは、成田龍一が指摘したように、引揚げを体験し、それを描いた作家がほとんど女性であることと不可分であると思われる。詳しくは成田龍一「『引揚げ』に関する序章」『思想』No.955、岩波書店、2011年、149-174頁を参照。ちなみに韓国近代文学のなかでも日本人女性に対する性的暴力が描かれており、チェ・ジョンヒの「人間史」（『正統韓国文学大系』オムンガク、1996年（初出1964年））が代表的である。

性の放つ鋭い悲鳴である⁽²¹⁾。ジェンダー化された戦争暴力をこれほどの確に示すものは他にはない。このテキストでは「金切り声」とともに物語が大きく動き、新たに展開される。擁子姉妹は、上記の涙ぐましい努力があっただろうか、幸い性暴力を受けずに済む。しかし、避難に訪れる先々では必ず性暴力を受ける女性を目撃する。その度に、擁子らは「安全」な場所を求めて移動し、やがては日本への帰還を選択する。「朝鮮人が日本人を攻撃し始」め、「町にいても安心して眠ることができない」(100頁)朝鮮に、勤労働員に出かけていた兄を一人ぼっちにしてまで引揚船に乗らざるを得なかったのは、日に日に増していく性暴力の脅威のためである。『竹林』での性暴力は戦争暴力の中心に据えられた特権的な表象であると同時に、物語を組織立てる物語の磁場である。

ただ、性暴力をめぐる一連のエピソードもまた慎重に読まなければならない。特に注意が必要なのがその描き方である。性暴力の場面は、まるでテキストを切り裂くかのように響き渡る被害女性の「金切り声」から始まり、他のどのエピソードよりも実写的に描かれている。このテキストが子供向けの児童文学であることを考えるとかなり異様だが⁽²²⁾、それは性暴力を中心に物語が構築され、テキストの首尾一貫性が保たれていることと不可分である。

だが、そもそも性暴力というトラウマ的経験が首尾一貫した全体に収まることは不可能に近く、実際は数々の矛盾と葛藤に引き裂かれ、整合性に欠けるのが一般的である。従軍慰安婦のハルモニたちの証言はそれを端的に語る。「生き証人」としての証言が、しばしば「でっち上げ」「でたらめ」「捏造」とバッシングされ、信

憑性が問われているのはそのためである。むしろ、『竹林』が「小説」という形式を取っている以上、「物語化された」性暴力の言説と「証言された」ハルモニたちの体験とを同じ土俵に上げて単純比較することはできない。とはいえ、『竹林』における首尾一貫性とハルモニたちの証言との間の甚だしい隔たりを無視することはできない。それが何を意味するかを明らかにするため、ここで岡真理がつとに行っていた問いを追体験してみるのは有意義であると思われる。

彼女は『記憶／物語』の中で戦争映画における過剰なりアリティに注目し、「戦場の体験とは、もっと断片的なものなのではないか。もっと、切れ切れな、整合性のない、全体像のなかに位置づけることができないいびつな体験なのでは」⁽²³⁾、と問いかける。その後、スピルバーグの戦争映画などを例えに挙げて次のように述べる。彼の「描く戦争シーンは、言葉で説明できるもの、炸裂する砲弾、四肢をもぎとられる兵士、舞い上がる粉塵……等々、再現できるものしか再現されて」⁽²⁴⁾ おらず、「説明できない出来事、抑圧された記憶は、登場しない。あたかも、そのようなものは存在しないかのように」⁽²⁵⁾ である。

同様なことが『竹林』の性暴力の場面にもいえる。その場面に欠かせない女性の「金切り声」はそもそも性暴力の酷さを象徴する、言葉にならない暴力の証である。女性にとって最も屈辱的で耐えがたい性暴力をめぐる記憶は、その恐ろしさのゆえに「切れ切れな、整合性のない」「いびつな体験」となるはずである。ところが、『竹林』ではこれが性暴力といわんばかりに、他のどのエピソードよりも写實的に描かれてい

(21) ただ一か所だけ、日本人女性への性暴力と無縁なところで「金切り声」が上がる場面がある。避難列車のなかで、衛生兵と看護師が生まれたばかりの死んだ赤ん坊を始末するため、母親からその子を取り上げようとすると母親は「夫の名を叫んで助けを求め、衛生兵が子供を殺し、どこかに捨てようとしている」と必至に抵抗しながら「金切り声」を上げる。『竹林』で上がっている「金切り声」には女性たちの経験した戦争暴力が集約されているといつよい。

(22) 韓国語版の序文として載せられた彼女の手紙によると、そもそも『竹林』は恵まれながら感謝を知らない「10歳のアメリカ人少女」に当てて書いたものであり(9-10頁)、アメリカでは児童文学のジャンルに振り分けられている。

(23) 岡真理『記憶／物語』岩波書店、2000年、27頁。

(24) 同上書、同頁。

(25) 同上書、同頁。

る。「金切り声」を上げる女性の腹の上に乗っかっている朝鮮人の男の姿や、足をバタバタしもがき苦しむ女性、そしてそれを目撃する度に恐さで膝の震えが止まらない擁子姉妹など、書き手の主観性を徹底に排除し、あくまで「言葉で説明できるもの」「再現できるもの」だけが忠実に再現＝表象されている。そこには戦争映画におけるスピルバーグと同じく、「出来事の現実〈リアリティ〉とは、まさにリアルに再現される〈現実〉からこぼれおちるところにあるのではないか」⁽²⁶⁾ という問いはまったくない。そのためか、『竹林』の性暴力をめぐるリアリティへの固執は再現された〈現実〉をかえって「出来事の現実〈リアリティ〉」から遠く離し、延いてはその出来事の否定につながる恐れすらある⁽²⁷⁾。リアリティを求めれば求めるほど、その過剰さゆえにそこには実は何も描かれていないという逆説が生じるのであり、『竹林』での異様としか言い様のない⁽²⁸⁾ 被害者女性の金切り声が空しく響いているのはそれを裏付ける。

いずれにせよ、『竹林』では性暴力をめぐって「説明できない出来事、抑圧された記憶は登場しな」い。それは擁子らが実際の被害者ではない、ということと無関係ではなからう。先述のように、彼女らもその脅威に直面し、それゆえ、男装をし、頭を丸め、立小便までする。その努力と幸運が重なって、犯されそうなところを辛うじて助けられる。彼女らは、あくまで性暴力を目撃しながら「だが、自分たちも危ないので」「何もできなかった」(117頁) 傍観者である。被害者と目撃者＝傍観者の間は決して埋められることのない距離があり、それゆえ性暴力というトラウマ的経験を首尾一貫したものとして写實的に描くことができたに違いない。

性暴力の場面において、擁子姉妹はつねに／

すでに性暴力の女性と対比をなす。それは最終的には彼女らの身体をめぐる純潔＝無傷性の強調につながる⁽²⁹⁾ が、それについては後述することにし、ここではとりわけ、次の二点を指摘しておこう。一つは、『竹林』は性暴力を中心に物語が組織立てられ、そこには何の矛盾もなく、苦悩する人物もなく、一切合切が首尾一貫性をもって予定調和的に完結していることである。もう一つは、「金切り声」を初めとする性暴力のリアリティへの拘りがかえって何も描いていないという逆説的状況を招いていることである。

3.〈国＝家〉物語の再生産

3.1 国家身体としての女性の身体

——純潔をめぐる「戦い」

『竹林』での擁子らによって語られた性暴力は、戦争の悲惨さや残酷さを告発すると同時に、自分らを戦争の「絶対的な」被害者として位置付ける最も強力な手段である。そこでは日本帝国主義による加害者としてのイメージが跡形もなくきれいに拭き取られ、しかも加害者／被害者をめぐるねじれた関係が生み出されている。しかし、繰り返しになるが、擁子らは性暴力の被害者ではない。あくまで朝鮮人男性によって犯される他の日本人女性を目撃し、その非人道的「罪」を伝える目撃者＝傍観者である。そうした彼女らが実際の被害者と一線を画しているのはいうまでもないが、注意すべきは被害者ではないゆえに浮き彫りにされる彼女らの無傷性＝純潔性である。

度々指摘されてきたように、戦争を生み出す「家父長制的男性支配型国家」⁽³⁰⁾ において女性の身体は国家身体と見なされる。チョン・ヒジンが的確に述べているように、「女性の身体は

(26) 同上書、27 頁。

(27) 詳しくは同上書、40 頁を参照。

(28) それは擁子姉妹が実際に性暴力の危機に晒された際にいかなる声も発せられなかったことと克明な対比をなしている。

(29) 純潔の概念は近代国民国家と不可分の関係にある。牟田和恵によると、日本で「純潔」の概念が形成されたのは明治期の近代化の過程においてであり、それが国民国家形成において重要な役割を担っていたという。詳しくは牟田和恵『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996 年を参照。

(30) 若桑みどり『戦争とジェンダー——戦争を起こす男性同盟と平和を創るジェンダー理論』大月書店、2005 年、5 頁。

男性の名誉の貯蔵庫であり、領土・血統の象徴として見なされ、男性集団間の「戦場」と化⁽³¹⁾す。このような意味体系においては、異民族の女性の体を犯すことはその女性の属する共同体=国を侵犯し征服することと同義であり、性暴力という女性の体を傷つけ、人権を踏みにじる「子宮の占領」⁽³²⁾は男たちの征服の物語における勝利の証となる。

「敵」の朝鮮人による「子宮の占領」から逃れた擁子らの無傷な身体は、「大日本帝国」の無傷性を象徴的に物語る。それは時折、彼女らの行水シーンと表裏一体をなしながら、スペクタクルに可視化された彼女らのイノセントな性的身体を通じて極大化される。物語のなかで彼女らは、何度も「シュミーズとパンツ」(111頁)の無防備の姿で行水を行う。それは一見、日本人が今、「危険な状況下に置かれてい」(102頁)る朝鮮で、しかも彼女ら自身も性暴力に曝されそうになり、危うかったことと矛盾しているようにみえる。「長い間、風呂に入っていなかった」(112頁)とはいえ、頭を丸め、立小便をせざるをえない状況まで追い込まれていたことを思い出すと異様である。だがそれには何の矛盾もない。矛盾どころか、擁子らの純真無垢さと、身体的無傷性とを連動させる手の込んだ物語装置に他ならない。

同様なことが、沖縄戦の女性学徒隊を主題化した『ひめゆりの塔』(1953年)や、そのリメイク版にもみられる。映画では彼女らの純真無垢さを際立たせるいくつかの小道具が用意され、繊細な細工が施されている。中でも最も劇的な場面を演出しているのがやはり行水のシーンである。1968年に公開された『あゝ、ひめゆりの塔』ではそれがより際立っている。肌着姿

のまま、小川で無邪気に行水を楽しむ女子学生らの身体が暗示しているのはいうまでもなく、彼女らの純粋無垢さである。このシーンのなかに映し出される百合の花はそれを象徴的かつ端的に示している⁽³³⁾。そうした彼女らの対角に位置し、克明な対比をなしているのがアメリカ軍(の加害性)であるのは多言を要しない。映画ではこの行水のシーンにおいて、まるで約束事のように、アメリカ軍の無慈悲な空爆が行われ、彼女らの多くが死に追いやられる。しかしながら、始終一貫して彼女らの体が「敵」の男たちに犯されることは一度もない。否、むしろ許されていないといった方が正しい。象徴的ではあれ、国家身体としての彼女らの純潔な身体はアメリカの被占領の否定につながるものであり、彼女らが太平洋戦争の象徴的存在として位置付けられるようになったのもそうしたことと無関係ではない⁽³⁴⁾。

それに従うとすれば、国家身体たる擁子姉妹が最後まで性暴力を受けず、無傷のまま引揚げられたのは「大日本帝国」の無傷性を暗示する。朝鮮人の男性から彼女らが命がけで守り抜いた純潔な体は「国」の完全性を意味しており、それはやがて日本帝国の占領の否定に結び付く。朝鮮人の加害性を強調することにより加害者／被害者をめぐる関係性が転倒され、これまで日本帝国が行ってきた加害は完全に空白になる。このような擁子らの涙ぐましい性暴力との「戦い」は、「国」のために戦場で散っていった若い命と何ら変わりのない「戦い」なのである。

3.2 家宝の短剣の象徴性

擁子姉妹は性暴力と「戦い」、自分らの純潔を守り抜いたが、一緒に避難していた母親はどう

(31) チョン・ヒジン「クルド少女の苦痛」『ハンギョレ新聞』2005年5月11日付。現在、ネット版「インターネットハンギョレ社説・コラム」で読むことができる。<http://legacy.www.hani.co.kr/section-001000000/2005/05/001000000200505112051184.html> (2005年5月11日 updated)。同様なことを若桑みどりも指摘している。詳しくは同上書、72頁を参照。

(32) 同上記事を参照。

(33) 百合は「白さ」の同義語として「純潔、無垢、処女性」を象徴する。ジャン・シュヴァリエ、アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』金光仁三郎他共訳、大修館書店、1996年、102頁。

(34) 小森陽一はひめゆり学徒隊の殉国美談化が、かえって沖縄戦の本質を見えなくしていると指摘する。林京子・松下博文・井上ひさし・小森陽一「原爆文学と沖縄文学：『沈黙』を語る言葉」『座談会昭和文学史』第五巻、井上ひさし・小森陽一編著、集英社、2004年、44頁参照。

なのか。今度は彼女らの母親に注目してみよう。

母親と不可分な関係にあるのが家宝の短剣である。このテキストでは擁子姉妹の性暴力との「戦い」が、母親の「家宝」の短剣への拘りと背中合わせに形象されている。家宝を守り抜くところ、母親の役割であり、また存在理由である。彼女が京都駅で息を引き取るまで、どんなに危機的状況であってもそれを懐に隠し持ち、守り抜く⁽³⁵⁾。戦争物資の調達のため、羅南の家に憲兵たちが勝手に上がり込んできた時も家宝の短剣だけは絶対に出さない。また慌ただしく始まった避難準備の際にも貯金通帳などは忘れても、家宝だけはきちんと持っていく。避難先々の検問所の検査の際にも「家宝の短剣を渡すことだけは出来ない」(120頁)といって、一時も肌身離さず身につけ、隠し通す。母親にとって家宝の短剣は自分の命に匹敵する、否、命を捧げてでも守らなければならないものである。

「家宝」という言葉が端的に示すように、先祖代々に家に伝わる短剣は「家」のメタファーである。それゆえ、母にとってそれを守ることは取りも直さず「家」を守ることであり、さらには「国」を守ることとなる。それこそ「国＝家」たる所以なのである。こうした母親の「家」への拘りは、息子への拘りと表裏一体をなす。いつも上品で、気品高く、冷静な彼女が、息子の予科練に入隊しようとした際にみせた尋常でない乱れや、避難生活のなかでもつねに息子との再会を求めて駅に向かい、いつ来るかもわからない彼を待ち焦がれている彼女の姿からは、その拘りがうかがえる。

しかし娘たちに降り注ぐ性暴力の脅威は息子への拘りを遥かに超えるもので、母は後ろ髪を引かれる思いをしながら仕方なく引揚げ船に乗る。彼女が日本に着いてからさほど時間が経たないうちに、理由不明の死を遂げることになったのは、長男を守り切れなかったことと無縁ではなからう。その後、その家宝＝短剣、そして兄への拘りは長女の好に受け継がれる。そのためか、擁子姉妹は、母がいなくなった後、以前

にもまして当時、引揚げ船が入港していた舞鶴港を訪れ、兄の名前と自分らの名前と住所を書いた新聞紙をあちこちに貼り出す。最終的にはそれがきっかけとなり、約8カ月ぶりの母親が死に際まで夢見続けていた兄との再会が果たされる。

ところで、家宝の短剣は性暴力とも無関係ではない。ここでわざわざフロイトの精神分析を引用するまでもなく、短剣は男根の象徴である。それは家父長制のシステムのなかでは女性を従属させる「男＝家父長」と同義であり、ときより女性に自刃をも強いる。女性の体に入ることが許されているのは、短剣に象徴される者だけである。女性器の膣を表わす英語の「vagina」が、「刀剣＝男根」の入る鞘でもあることは偶然ではない。擁子の母親が守っていた「家宝」の短剣は、「いざとなったら自刃するように」と命令する大文字の〈他者〉に他ならず、擁子らの身体が犯されることは最初から禁じられていたのである。

かくして『竹林』での擁子の母娘の「戦い」はすべて「国＝家」を守ることに収斂される。擁子姉妹の性暴力から純潔を守ることと、母親の家宝の短剣と家の後継者の兄への強い拘りは表裏一体なのであり、そこでは戦争暴力を暴くはずの性暴力すらいつのまにか大きな「国＝家」の物語へと横滑りし、このテキストをナショナルな自己肯定の物語にすり替える。

4. 帝国主義の亡霊 —— テクストを裏切るテキスト

4. 1 「母の帝国」という魔法のボール

端的に言って『竹林』は「平和に関する本」ではない。むしろ被害者意識に裏打ちされたナショナルな自己肯定の物語なのであり、かえって平和を乱しかねない問題作と呼ばなければならない。「ヨーコ論争」の勃発はその好例である。

著者は韓国語版の出版の際にわざわざ手紙を寄せ、韓国の読者に自分がいかに韓国＝朝鮮を愛しているかを力説した上で、これからは互い

(35) 母親はそれを一度だけ手放す。それは日本に帰る船に乗る際に、「乗船のためには日本人は銃やナイフといった危険な武器を渡さなければ」(119頁)ならなかったため、長女の好に預けていた。

が「憎しみ」合うのではなく、「愛」と「優しさ」をもって世界平和のために一緒に歩んで行こうと誘う。しかし韓国の読者のなかでその期待に応えられる人はほばないに等しいだろう⁽³⁶⁾。『竹林』のどこを読んでも彼女のいう「愛」は読み取れない。彼女が「愛」を寄せているのは韓国（人）＝朝鮮（人）ではない⁽³⁷⁾。そうではなくむしろ、彼女の最も「幸せ」だった過去なのである。そこには看過できない大きな問題が横たわっている。それを明らかにするために、まず、タイトルにもなっている「竹林」とそのなかにあった擁子の「家」に注目してみよう。

擁子家族は1945年7月29日夜中、避難列車に乗る前まで竹林に囲まれていた羅南の家で「何不自由なく幸せに暮らしてい」（4頁）た。そこでの暮らしは擁子の人生のなかで最も「幸せだった日々」（205頁）として記憶される。日本に引き揚げられた後、「孤児同様」（同頁）の逆境のなかでもそれを跳ね除け、明るく前向きに生きられたのはその記憶があったからである。いつの日かその「幸運」（同頁）が再び訪れることを信じ、一所懸命に生き抜いた彼女にとってその記憶は生きる希望と同義である。竹林のなかの家は、擁子やその家族のこの上ない幸せな過去が凝縮された象徴的な空間、つまりユートピアなのである。

その家を囲う「竹林」は、擁子らの「平和、

愛、幸せのすべて」（28頁）を守ってくれる特権的な記号である。高くそびえ立った竹林は彼女の家を「外」の世界と切り離す。そのなかは、「外」の雑種性に貫かれた植民地のハイブリッドな世界や、戦争の激しさに増して混沌を極めてゆく社会情勢とほとんど無縁な自己完結した小宇宙である。何もかもが整然としていて秩序に乱れが見られない。そのなかでの擁子の「幸せだった日々」は、完璧というほど日本帝国の生活風景によって支えられている。満州で国のために精力的に働く父親と、彼の不在中でも家族を優しく包み込んでしっかり守る母親、そして「先祖代々から伝わり、父へと受け継がれた」「富士山の文鎮を通じ」、「祖国の堂々とした山に憧れ、その美しさに憧れなが」（12 - 13頁）ら、「武運長久」（13頁）と戦争の勝利を祈願し、毎日書道と茶道、日本舞踊の稽古に励む擁子と、優秀で家族思いの兄と姉。かれらの、「花がいつも優雅に生けられてい」（12頁）床の間での家族団欒でほのぼのとした日常は、まさしく「大日本帝国」の求める典型的な理想形である。そこに〈他者〉としての朝鮮人が入る余地はなく、読む人誰もがそもそもそこが朝鮮であることを完全に忘れさせられる。

それがどういう機能を果たしているのかについては、エイミー・カプランの論議が示唆的である。彼女は『帝国というアナーキー』という

(36) とはいえ、韓国人のすべてが『竹林』に批判的だったわけではない。代表的なのは「代案空間「草（ブル）」という進歩的な芸術団体である。「ヨーコ論争」の最中に「ヨーコ物語、外典づくり」というタイトルで女性作家による企画展とワークショップを行い、話題を呼んだ。そのグループのサイトによると、「性的脅威を経験した女性がそれについて沈黙することで、戦犯国家の国民としての責任を果たしていることにはならない。日本人女性が経験した復讐的な性的暴力はそれ自体酷い性的搾取であり、脅威である。（戦争による——引用）女性の性的搾取はこれまで長い歴史があるが、だからといってそれを当たり前のようにしておくわけにはいかない。その経験はそれだけで「話す」権利がある」といい、『竹林』を擁護する。<http://lateralky.egloos.com/1343048>（2014年6月3日 accessed）を参照。

(37) それを端的に示しているのが、〈他者〉としての朝鮮人の不在である。むしろ、『竹林』に朝鮮人がまったく登場しないわけではない。日本人女性に性暴力を加える無数の男たちや、無辜な「善人をも惨殺する」（83頁）「殺人者」（131頁）の反日朝鮮軍（Anti-Japanese Communist Army）と共産兵（Korean Communist）、また擁子らが様々な節目に出会う「意地悪」（120頁）な係員など、実に多くの朝鮮人が登場するものの、かれらには存在性が与えられていない。登場人物すべてに名前がなく、自分を表現する手段も持っていない。日本語がまったく分からず、まれに話せる人がいても片言の「下手な日本語」（54頁）しかできない。かれらが意味を持つのは、単に「日本帝国の一員であるにもかかわらず、日本人を嫌い、戦争を快く思っていない」（18頁、傍点引用者）い「恐ろしい」（同頁）「敵」として表象されるときだけである。そうしたかれらを、自己形成に不可分な存在として、絶え間なく自己存在への問いをもたらす「他者」と見なすことはできない。ただ、朝鮮人の登場人物のなかでも下の名前が付けられた例外の人物がいる。凍死寸前の淑世を助けてくれた金さんの二人の息子・喜朝と喜王がそれである。それはおそらく彼らが学校で教育を受け、日本語が分かる、いってみれば「日本帝国の一員」に近い存在であったためと思われる。

著書のなかで、家庭性の概念をアメリカの帝国論に結び付け、その共犯関係を明らかにした。以下はその一部である。

(前略) ドメスティシティと〈マニフェスト・ディスティニー〉が交差する空間表象は、女性領域と男性領域の弁別について格好の裂傷を示してくれているように思われる。いっぽうでは整然と統制され明確な敷居をもつ内部空間としての家庭が唱えられ、そのいっぽうで境界も区分ももたない空間であるフロンティアが無限に広がっている。男女の領域分離主義というイデオロギーは、家庭という空間を揺るぎなく安息の寄港地、つまり領土征服に勤しむ男性の活動と均衡関係にある女性の活動の場として放置させる。(中略)「女性の真なる領域」とは、じつをいえば、征服した異国の領土を家族かつ国民という家庭的＝国内的な空間に変容させてしまうような、流動的で機動的な前哨地だったのだ。同時に、ドメスティシティに焦点を合わせることで暴力的な戦争の痕跡はさっぱりと消去され、まるで魔法でもかけられたのかのように、リオ・グランデの異国的な資質は焼失し、ニューイングランドの親しみのある光景と化してしまう。(38)

カプランはアメリカが最も領土を拡張していた時期に家庭性ドメスティシティという言説が、〈マニフェスト・ディスティニー〉という言説と密接に絡み合っていることに注目し、帝国の言語が家庭の修辞学にすり替わっていることを突き止める。その一例が、家庭性に基づいた「中流階級文化の中心的な教義」の「母の帝国」(39)である。それは、一言でまとめると、「母」のイメージに満ち溢れた「女性の真なる領域」としての「家庭的＝国内的な空間」である。カプランによると、その「母」に振り分けられた家庭的＝女性的空間が19世紀半ばのアメリカの帝国主義

的領土拡張における矛盾を覆い隠し縫合する機能を担っているという。

これまでアメリカの様々な文化生産物が繰り返し再生産してきたように、〈マニフェスト・ディスティニー〉における男性的な荒々しさは、よくステレオタイプ化された牧歌的な家族の物語へとすり替わり、女性＝母性的な柔かさで包まれる。西部劇などの常套な手法でもあるそれによって、征服された「異国の領土」は「家族かつ国民という家庭的＝国内的な空間に変容させ」られる。それによって開拓者の侵略の歴史における暴力的政治コンテクストは跡形もなくごっそり削ぎ落とされ、帝国主義の征服と順化は〈明確な運命〉として正当化される。「家庭と帝国は空間的にも政治的にも相互依存関係にある」(40)のであり、帝国における暴力と侵略の歴史は理想的な家庭が営む日常のなかに隠れ、その実相が見えにくくなる。

その意味からすると『竹林』での朝鮮で営まれた擁子家族の幸せな日常は、満州で働く父親と対をなしながら日本の植民地支配の暴力性にすり替わり、その政治的コンテクストを削ぎ落とし余白にする機能を担っているといえる。彼女の幸せな家族の物語を支える「羅南」と父親の働く「満州」は、朝鮮半島から満州に至るかつては「朝鮮」や「中国」だった「異国の領域」が今や日本帝国の「家族の一員」になったことを暗示する特権的なトポスなのであり、繰り返される日常のなかでそれが「自然な」ものとして全体に取って代わる。結局のところ、優しい母を中心に繰り返されてきた擁子家族の幸せな日々は、朝鮮や満州で行われている日本帝国主義の暴力性を覆い被せつつ、植民地という「異国の領土」を日本という「家庭的＝国内的な空間」に変容させる、実に「魔法」のバールのようなものである。そこでは当然ながら〈他者〉が否定される。『竹林』で〈他者〉としての朝鮮人が不在になっているのはそれと不可分である。

(38) エイミー・カプラン『帝国というアナーキー——アメリカ文化の起源』増田久美子訳、青土社、2009年、49頁。

(39) 同上書、48頁。

(40) 同上書、49頁。

4.2 帝国主義的ノスタルジア

——「竹林」遙か遠く

ところが、植民地朝鮮での擁子の「幸せだった日々」は、日本の仕掛けた戦争によってすべてが失われる。竹林のなかの家に別れを告げた瞬間から、それはもはや記憶のなかにしか存在しなくなる。彼女は日本に引き揚げられた後、その「幸運」だった日々をたびたび「懐かしき思い出」(223頁)し、それがいつかまた訪れてくることを願う。その記憶が彼女の「生きるか死ぬかの戦い」(5頁)を勝ち抜く原動力であったことは否めない。しかし何の変哲もないようにみえる彼女の懐古・懐郷にも注意を払わなければならない⁽⁴¹⁾。それは何と言っても彼女らが植民地朝鮮で享受していた「平和、愛、幸せの全て」が日本帝国主義の暴力に裏打ちされていたものであり、その「幸運」こそ、暴力の産物に他ならないからである。その意味からすると、擁子＝著者の植民地朝鮮を懐かしむ懐古は、レナート・ロサルドのいう「帝国主義的ノスタルジア (imperialist nostalgia)」⁽⁴²⁾と類似している。

ノスタルジアの語源は17世紀末にまで遡る。ギリシャ語のnostos (帰郷・帰還)とalgia (苦痛)の造語であるその語は、故郷に帰りたいが帰れない、二度と目にすることが出来ないかもしれないという恐怖に関する病理的現象を指す。それが、帝国主義的領土拡張と植民地主義が広まっていった18・19世紀には前線の兵士たちの間で蔓延し、精神病理学の重要な研究対象

となる。

ロサルドは、ノスタルジアという故郷への強い思いを帝国主義と関連付け、「帝国主義的ノスタルジア」と名付ける。それはきわめて複雑で重層的な概念であるが、一言で表わすと帝国が失っていったものを新たなフロンティアにおいて取り戻そうとする心性である。ここで注意すべきは、帝国主義的ノスタルジアの奥に沈んでいる攻撃的な衝動である。ロサルドは、「帝国主義的ノスタルジアの中軸には逆説がある」⁽⁴³⁾と述べる。その逆説とは「ある人間が誰かを殺しておきながら、その犠牲者への哀悼に沈んでいるということである。もっと穏やかなかたちでは、生活形態を意図的に壊変しておきながら、この変更以前のままだに事態がとどまっていないことを惜しむという逆説にな」⁽⁴⁴⁾る。そうした帝国主義的ノスタルジアは「人々の想像力をとらえるためにも、残忍になることも少なくない支配に関与しているみずからの共犯性を隠蔽するためにも、「罪のないあこがれ (innocent yearning)」のポーズを取」⁽⁴⁵⁾る。

帝国主義的ノスタルジアはひじょうにアイロニカルな憧れである。問題はそれが過去、帝国の植民先で振り回した暴力の否定につながる、すなわち「集団や個人の責任を抹消し、釈明の義務を果たす代わりに強力な論述を展開する」⁽⁴⁶⁾ポーズであるということにある。帝国主義的ノスタルジアは帝国支配の暴力を覆い被せつつ、自分との共犯性を覆い隠す「罪のないあこがれ」というマスクなのであり、その「イノセン

(41) 『竹林』はもとよりノスタルジーに満ち溢れる作品である。著者の日本語版の刊行の際に寄せた文によると、「タイトルの『竹林』には、羅南の自宅への思いと、結局行くことが出来なかった青森の母の実家への思いという二つの意味が込められている」(228頁)という。

(42) これはサナート・ロサルドが「近代のノスタルジアにあらわれる表象の暴力に関する研究」のなかで名付けたものである。詳しくは、Renato Rosaldo, *Imperial Nostalgia, Representations. No.26. Special Issue: Memory and Counter-Memory*, University of California Press, 1989 (現在、以下のサイトで読むことができる。http://lamc.ulb.ac.be/IMG/pdf/Rosaldo_1989_Imperial_nostalgia.pdf、2014年6月12日 accessed)。または『文化と真実——社会分析の再構築』日本エディタースクール出版部、1998年や、彼の分析を援用しているカレン・カプラン『移動の時代——旅からディアスポラへ』村山淳彦訳、未来社、2003年などを参照されたい。

(43) カレン・カプラン、同上書、75頁。または Renato Rosaldo, *op.cit.*, p.108.

(44) 同上書、同頁

(45) 同上書、同頁。

(46) 同上書、同頁。

(47) Renato Rosaldo, *op.cit.*, p.110.

ト＝罪のなさ」を強調するために「際立った優しさ・柔らかさ（compelling tenderness）」⁽⁴⁷⁾が動員される。

擁子を通じてノスタルジックに回想される「幸せだった」朝鮮の羅南での記憶は、著者ヨーコの帝国主義的なノスタルジアと見なすことができる。被植民者という特権層としての思いに満ち溢れている擁子＝著者の懐古・懐郷の心性は、まさしくロサルドのいう「罪のないあこがれ」そのものである。今はもはや記憶のなかにしか存在しない彼女の「幸せ」は、日本帝国主義の不正な侵略と搾取の結果に他ならず、負傷兵のために慰問公演をし、「武運長久」と書いて戦争の勝利を願う軍国少女としての彼女が、日本帝国主義と共犯関係にあったことによってもたらされたものである。しかしその事実には繰り返し強調される擁子の「純真無垢さ」や「優しさ」によってかき消されている。彼女のあだ名の「小っちゃいの（Little One）」という言葉が物語の冒頭から執拗なまでに反復されていることや、どんな苦難のなかでも家族に対する思いやりや優しさを失わないエピソードが、テキストのあちこちに散りばめられているのはそれと無縁ではない。

当然、そこでは「自分たちが日本の軍勢力によって守られた侵略者であった」⁽⁴⁸⁾という帝国主義の加害者としての記憶は見事に消し去られ亡却の彼方へ葬られる。その際、記憶を占領してくるのが被害者意識である。それにより擁子や彼女の家族は戦争の渦に巻き込まれ、運命が変わってしまった数多くの人たちの一人となる。その論理では、例えば「中国人女性の強姦」や「従軍慰安婦」に対して「おあいこ」「あんな時代だから仕方がなかった」という反応に結び付く⁽⁴⁹⁾。いずれにせよ、『竹林』は擁子＝著者の帝国主義的ノスタルジアに貫かれたテキストであり、これがいかに暴力的なものなのかはいうまでもない。

おわりに

以上のように、本稿は『竹林』という著者の戦争体験を基に著された自伝的小説を取り上げ、それがいかに「問題作」であるのかを、テキストの政治的無意識性に光を当てて、浮き彫りにしたものである。

『竹林』は二つの相反する物語によって構築されている。一つは、戦争の悲惨さや酷さを告発し、平和の大切さを訴える物語であり、もう一つは、戦争によって翻弄された主人公＝著者の「生」を被害者として構築し直し肯定する物語である。一見するとこのテキストは著者のように「平和に関する本」のようにみえる。しかしすでに本論で確認したように、「平和」とは無縁なものである。より正確にいうと、それを裏切り、終局には大きな物語に包摂される帝国主義的ノスタルジアに満ちたナショナルな自己肯定の物語なのである。

とりわけ、『竹林』の物語の中心に据えられ、物語を組織立てているのが性暴力である。それは戦争暴力を告発すると同時に、擁子らを戦争に翻弄され、人生を狂わした多くの被害者の一人にさせてくれる最も強力な「武器」である。その性暴力をめぐる何より問題だったのが、リアリティへの拘りと首尾一貫性である。

性暴力の場面では、その出来事をめぐる過剰性のゆえ、かえって被害女性らの苦痛を象徴する「金切り声」が虚しく響いてしまう。そこで強調されているのは性暴力の酷さというより、むしろ擁子姉妹の「戦い」であり、その純粋無垢な身体である。女性性を抑圧し、「男」に見せかけるための涙ぐましい努力によって彼女らの純潔は守り抜かれる。それが意味を持つのはしばしば女性の身体が国家身体の変換として用いられるからである。それゆえ、擁子姉妹の純潔をめぐる「戦い」は戦場で散っていた若い男たちと同等なものとなる。

何があっても「勝つ」ことしかない彼女らに苦悩する姿はない。著者が自分の戦争体験を

(48) 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年、61頁。

(49) 同上書、同頁。

「戦い」に喩え、しかも自分を「勝者」として位置付けているのは偶然ではなかろう。『竹林』は、ジーン・フリッツがいうように「擁子の勝利の物語 (the story of her victory) (5頁) であり、その意味では著者の自己肯定の物語、それ以上でも以下でもない。

最後に強調しておくべきは、その自己肯定の物語がつねに被害者意識によって裏打ちされていることである。その意識こそ、日本帝国主義の「侵略の歴史と過ちに対する記憶喪失を招」⁽⁵⁰⁾いた主な要因であり、廃墟となったヒロシマを中心に書き直された日本のナショナル・ヒストリーの中心軸である。被害者意識に貫かれている『竹林』は、いってみれば日本のナショナル・ヒストリーの域を一步も出しておらず、その反復に過ぎない。「私の家族もまた第二次世界大戦の歴史に巻き込まれた多くの人の一人」という被害者の立場から日本の暴力の歴史をすべて余白にしている『竹林』は、未だに苦しんでいる人たちからの問いに何も答えていないどころか、かえってあまりにも無責任な応答となる。

いずれにせよ、「罪のないあこがれ」のポーズを取る帝国主義的ノスタルジアと、転倒された被害者意識を経由したナショナルな自己肯定の物語を通じて、日本帝国主義の暴力性の矮小化と責任回避の契機が滑り込んでくることを『竹林』は例証している。

付記：本稿は JSPS 科研費 25360030 の助成を受けたものである。これまで様々な形で研究に協力してくださった方々にこの場を借りてお礼を述べたい。

(50) 米山リサ「廃墟から——記憶の政治に光を当てて——」『民主主義と人権』第4巻1号、全南大学校5・18人権研究所、2004年、109-110頁。